

東洋英和女学院設立申請書より

①

七十年誌には、「創立まで」及び「創立の頃」の項に「(上略)設立認可を申請すると共に」又は「明治17年(1884)9月東洋英和女学校の設立認可が下り(下略)」とありますが、その申請書(明治17年9月22日付)が、東京都公文書館(港区浜松町)に収納されていたので、(写真)その「私立学校設置願」の一部を御紹介致します。

一、設置目的 当校ハ□倫道德ヲ本トシ修身科ヲ始メ別表ニ列記セン各学科及ビ英文ノ教科ヲ教授シ、優良ナル婦女ヲ育成スルヲ目的トス

一、名称 東洋英和女学校

一、位置 東京府下麻布区東鳥居坂町十四番地

一、教授法ノ要旨

ここには、次のような教科が各説明されています。

修身学、読書、算術、地理学、家政経済学、動植物学、理化学、生理学、習字、画学、裁縫、体操、唱歌、英文学、

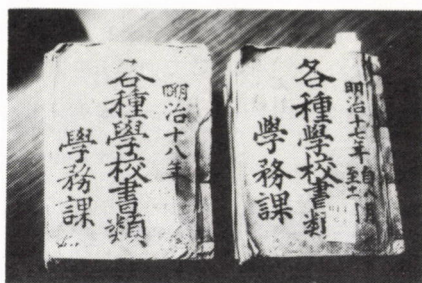
このうち、英文学についての説明はこうです。

英文学ハ之ヲ分テ読方、書取、会話、文法修辞、作文、習字トス。読書ヲ援クルニハ教員生徒ノ発音ヲ正シ綴字及意義ヲ暗誦セシメ又邦語ニ口訳セシメルヲ初メトシ漸次進歩シ渋帯ナク英文ノ読下スルヲ得ルニ及ビ教員其意ヲ生徒ニ問ヒ或ハ自ラ之ヲ講シ亦筆記セシメテ英文ヲ明瞭ニ解得セシム。

次に、試業について

一、試業規則 試業ハ分テ入学定期月次ノ三種トス 入学試業ハ入学ノ際試験シソノ

栗原正己



量ニ応シ合格ノ學級ニ編入ス 定期試業ハ二月七月ノ両度、月次試業ハ月末ニ執行スルモノトス(下略)

一、起業終業時限 毎日五時間トシ午前九時ニ始メ午後三時ニ終ル 土曜日ハ午前九時ニ始メ正午十二時ニ終ル

以下、休業日、入学退学規則、寄宿舎規則、生徒心得、生徒罰則、入学生徒学力という順に記されて居り、次に

一、入学生徒年令 満十二年以上ノ者ニ限ル

一、生徒定員 通学生二十六名寄宿生二十四名計五十名ヲ定員トス

以上までが、大体生徒に関する内容のものですが申請書は更に教職員について次のように記されています。

一、学校長教員職務心得 校長ハ校内ノ事務一切ノ件ヲ総理シ教員ハ教授ハ勿論 生徒ノ品行ニ注目シテ風儀ノ矯正ヲカムルモノトス(下略)

一、教員々教 教員四人内外国人式名本国人式名 但シ婦人ヲ以テ教員トス

(以下、次号につづく)

マーサ・ジュリア・カートメル

ここに書かれる女性はカナダの方で、ハミルトン市というのは、カナダの一つの都市の名前です。

ある晩、一人の若い女性が単身、ハミルトン市に着きました。彼女はここで何年かを過すことになったのです。年は十三才、両親を失って悲しみに沈んでいました。名前はジュリア・マーサ・カートメルといました。悲しみの中で、叔母のミセス・サザランドから優しく迎えられました。サザランド家はすぐれたクリスチャンホームで、マーサもその娘さん達と同様に、遠慮のない、しかも上品な生活をさせて頂きました。

暫くするとマーサは教師になりたいと思うようになりましたが、当時ハミルトン市には師範学校というものはありませんでした。しかし叔母様がトロント市の師範学校に入学させて下さったので、マーサはその初期の卒業生の一人となりました。彼女はまじめな娘でしたから、その学校を卒業してから、教育に非常に興味と高い理想をもち、何年か教師として働きました。

そのうちに、彼女にとってはもっと高い広い世界が開かれることになったのです。カナダのメソヂスト教会が1874年(明治7年)に大会を開きましたが、その時、遠い日本にもキリスト教の伝道をしようという議が起り、選ばれた何名かの牧師方が東京に送られ、伝道が始められました。最初は普通の男子や男学生だけがその対象でした。女子は大人でも学生でも、そこまで手を延ばすのは困難だと考えられたのです。

その頃、マーサも海外伝道ということを考え始め、自分がどこかで実際に働かせて頂く事は出来

ないものかという願いを強く持っていました。

1880年(明治13年)に、カナダでは婦人宣教師団が結成されました。その頃マーサが書いた手紙の一つにこう書かれています。「強い何か私を動かし、私は頭を垂れて祈りました。私は創造の主のみ前に居るのだとはっきり感じ、こう申し上げました。『主よ、あなたは私のすべてを御存じです。私が、夢ではなく本当にみ声を伺ったのなら、そして私をお用い下さるのなら、どうぞ私をお遣わし下さいませ』と祈り続けました。」

その翌年、マーサ・カートメルは、日本に行く最初のカナダ婦人宣教師に選ばれたのです。

1882年11月23日、彼女は故国を何千哩も離れて、涯しない太平洋を渡り、初めて耳にする言葉話す人々の国に上陸し、クリスマス頃漸く東京に着きました。

最初は先ず、言葉を習うことでした。必要に迫られただけでなく、新しい隣人や友人達と直接に交わりたいという強い願いをもって努力しました。ところが驚いたことには、日本では女子は学校へ行くという習慣がない事が分かりました。少数の人は家庭で教えられるか、勉強中の兄弟の傍で、静かにきいているだけでした。マーサは「どうにかしてこの娘達のために、キリスト教主義の学校を建てられないものか。必ず出来る。」と強く願うようになり、大胆にも宮内省に願い出たのです。そして1884年に、故国の伝道団と協議した結果、とうとう東京に女学校を建てる許可を得ました。麻布鳥居坂に小さい家を求め、三人の教師のもとに二人の生徒をもった東洋英和女学校が、

1884年(明治17年)の11月6日に開校されました。その後入学者は急増し、建物も増え、女子の為のキリスト教主義の教育は真剣に始められたのです。これはその頃、麻布学校とよばれ、初代の校長は勿論、ミス・マーサ・カートメルでした。この校長が土台となって、女子のためのすばらしい教育と伝道の基礎が築かれたのです。

次にミス・カートメルは、どうしたら他の日本婦人達とも近い関係になれるかと考え始められました。ところがその答は全く予期しなかった方面から与えられました。学校の近くに、体のきかない中風の婦人が住んで居られましたが、この西洋人について尋ねました。「何故この方はお国を離れて日本に来られたのかしら。どんな人?、本当に日本語が話せるの? 私に逢いにこの家までも来て下さるかしら」などと知人に語られるのでした。ミス・カートメルは喜んで、間もなくその家を訪問なさいました。この婦人は、スラッと背の高い赤毛の青い目の人を初めて見ましたが、友情の手を優しく差し出され、無言の中に愛情と信頼の心を感じさせて下さいました。此の日に続いて近所の人々も招かれてミス・カートメルに紹介され、お互い間に親しみをもつようになりました。聖書の勉強も始められ、だんだんに地方でも聖書がポツポツ読まれ、少数ながら、日本の婦人が聖書の話をしたり、教えたりするようになりまで教育されたのです。

その後、ミス・カートメルは健康がすぐれず、帰国されましたが、間もなく回復なされると、カナダのあちこちを遠く広く旅して、「東京の学校」について語られ、教師の必要性がどの位大きいのか、すべてを捧げて伝道に挺身する婦人がいかに求め

られているかを熱心に訴えました。この方の献身に動かされて、カナダの多くの教会から優れた婦人達が日本の為に挺身するようになりました。

所は変わりますが、山梨県の甲府市に、カートメル女塾という小さな職業学校が1915年に始められ、ミス・マーガレット・ケギー宣教師の指導の下に附属幼稚園も盛んになり、聖書を教える多数の日本婦人もここから送り出されました。このカナダ婦人伝道団のすばらしい仕事の一部は戦火にあうまで25年間続けられました。今は母となり祖母となった卒業生は、娘や孫たちに、「カートメル」とはどういう名か、外国の先生方がどうしてこの様な教育をなされたのかを話すのが楽しみでした。甲府教会に90才近く迄奉仕された小野善太郎牧師も、そのバイブルクラスの出身者です。

ミス・カートメルは晩年は、ハミルトン市の姪御さん方と楽しく暮らされ1945年3月20日に100才で亡くなりましたが、この短い文には尽くせないほどすばらしい御生涯をお送りになりました。ハミルトン市のセンチナリー教会(ミス・カートメルの母教会)には、マーサ・カートメル会という一団があり、現在も会員は活躍して居られます。

甲府のカートメル・センターで働き、先生が残されたすばらしいお仕事の跡を、敬愛の心をもってたどりつつ毎日を送った楽しい思い出を胸に抱いてこの一文をまとめました。

(付) (署名) Myra E. Simpson

本学院創立85周年に寄せて、多くの資料をもとにまとめられたものを、旧中高部教諭、短大教授 松尾芳子先生(卒業生)が本文を多少縮少して翻訳して下さいました。

収集資料一覧Ⅰ（明治・大正期）

1. 明治17年、東洋英和女学校設置願及開校願等の諸届（写）
2. 明治18年、規則改正及教員増加の届（写）
3. 学則、TOYO EIWA JOGAKKO
1884年-1909年（写）
4. 日本メソジスト教会年会第二回東部記録より
ミス・ブラックモアの報告（写）明治42年
5. カナダメソジスト教会婦人ミッション年会報告より長野県の幼稚園（写）1895-1920年
6. 明治43年天長節祝賀大文学会プログラム
7. 明治43年地久節祝賀大文学会プログラム
8. 大正8年12月東洋英和女学校創立35年祝賀記念同窓会々報
9. 修業証書（明治41~44年）
10. 卒業証書（明治45年、大正8,11,13年）
11. 卒業式プログラム（大正9,11年）
12. クラス・ディナーのメニュー
13. オルガン科修了証
14. 道具箱
15. 写真一覧
 - a. 明治初期の生徒
 - b. 新校舎全景
 - c. 明治中期の生徒（予科・幼稚科）
 - d. 明治後期の小学科全員
 - e. カナダの宣教師の方々
 - f. 寄宿舎の生活
 - g. ミス・ブラックモアと大正期の小学生
 - h. 大正時代の生徒
 - i. 初めての修学旅行-日光-（大正9年）
 - j. 西洋料理の実習（明治33年）
 - k. 職員会-絵ハガキ-（大正3年）
 1. 卒業写真（明治45,大正8,11,13年）

次の資料をさがしています

1. 都史紀要9.東京の女子教育 S.36年 東京都発行
2. The Annual Reports of The Womans Missionary Society of The Canadian Methodist Church
3. TOYO EIWA JOGAKKO CALENDAR
4. 明治大正期の学校生活、カリキュラム等が知ることの出来る資料
5. 戦時中の学校生活がわかるもの

あとがき

主の恵みと導きのもとに、東洋英和女学院の歩みが少しずつあきらかにされてきている。皆様のご協力感謝申し上げます。先人達から多くを学び勇気と励ましを与えられます。よきクリスマスをお迎え下さい。
(中野・朽木・栗原・高橋—中高部)